

生涯学習実践事例部会～生涯学習の実践事例～ —第2回日本生涯教育学会会長賞の選考—

井 上 講 四

(琉 球 大 学)

はじめに

本部会は、昨年第10回大会より設けられた「日本生涯教育学会会長賞」の受賞対象となる部会である。これは、本学会が研究者の単なる発表の場ではなく、多種多様な実践の交流の場として、理論と実践の相乗深化を強く社会に働きかけようとするものである。審査には、会長並びに予め委託された数名の会員が当たることになっている。なお、司会進行を、今回は広島安田女子大学の木家正文氏と琉球大学の井上が努めさせていただいた。

1. 発表の概要

- (1) 東野正春氏（道都大学）：生涯学習社会に対応する社会教育主事の養成—新しい社会教育主事課程の実践—

昭和53年4月開学の道都大学では、社会教育主事の養成が、57年4月より行われている。63年4月より、改正された「社会教育主事講習等規程」に基づき、現在新たなカリキュラムが実施されている。

発表は、課程編成の基本的な考え方、開設科目の内容、「社会教育実習」及び「社会教育課題研究」の具体、大学における実践的社会教育主事養成の課題と展望等であった。発表の中心は、実践的な学習内容であ

る「実習」と「課題研究」の紹介にあった。他のカリキュラム（「社会福祉実習」「保母実習」「教育実習」等）との競合の問題があるものの、それらとの有機的関連を積極的に位置づけ、相互波及をねらったものにしていているとのことであった。

注目されたのは、「実習・課題研究ノート」の作成、社会教育職員からの講義、青年の家での宿泊学習（学外講師として現在6人、将来は12人の枠とか）及び地元市教委あるいは出身地教委主催の研修事業へのボランティア的参加の取り組み等であった。なお、学内教官の意識や講義の変容、地域と大学の距離の接近、地域からの協力等が、今後の課題として述べられた。

(2) 高橋興氏（青森県教育庁）：長寿学園開設事業の課題と展望―青森県の場合―

続いての発表は、青森県教委の高橋会員であった。同県は、全国平均を上回る勢いで高齢化が進み、平成37年には秋田県に次ぐ全国第2位の高齢県になるとされ、高齢化対策が急務となっている。そのため県は、平成2年2月「県高齢化社会対策大綱」と策定し、そこに「高齢者の生きがい創造」や「地域社会参加活動の促進」を盛り込み、高齢化対策に積極的に取り組んでいる。

ところで、周知のように「長寿学園開設事業」は、文部省所管の国補事業である。高齢化対策については近年、多くの自治体でも積極的な対応がみられるが、他省庁・他部局関係の事業が数多くあり、その連絡・調整、連携・協力が叫ばれている。同県の場合、この事業を単なる一国補事業としてではなく、県全体の高齢化社会対策の一環として位置づけ、「あすなろ尚学院」として実施。実施主体は「県総合社会教育センター」だが、関連部課・団体の代表からなる「企画運営委員会」が設置され、文字通り全県的な取り組みとして実施されている。

注目されたのは学習内容の選定で、学習プログラムの編成を最重視したということである。そのため、事務局の発案で走るのではなく、でき

るだけ学習者の意思を尊重し、既に多様に展開されている市町村の高齢者学級等との関連を配慮しているとのことであった。今後の課題としては、財政問題と事務処理の問題及びそこから生じる開催地域の問題、関連事業間の学習成果の相互評価あるいは連絡・調整の問題、魅力ある講師の確保・発掘の問題等が出された。

- (3) 玉手忠男氏（埼玉県行田市太井公民館）：11年間の花いっぱい運動の実践事例―主として北海道在住中の実践事例―

次は、埼玉県行田市太井公民館の玉手忠男会員の発表であった。玉手会員は、昭和53年から63年までの間、北海道置戸町及び森町で花いっぱい運動の仕掛人として活躍されてきた実践家である。現在地に移られてからも、この活動は続いている。地道な活動家にしか感じさせない、一種の爽やかさと感動が、物静かな語り口から伝わってくるようだった。

発表は、昭和55年から62年までの森町教育委員会嘱託時代の活動及び現在の太井公民館での活動が中心であったが、いかに同会員が、この運動を多大な労苦の中で進められてきたか。それは、発表要旨に示された年表からも一目瞭然であった。「花を通しての人間の触れあい」。土づくりから花壇完成まで、仕掛人の働き、参加者・協力者の働き。森町では、計20の花壇ができ上がったという。

こうしたなかで、「花いっぱい運動は土から始まる」「茶の間から地球を考える」「命あるものを大切にする」といったことが説かれ、また「人間の連帯感」「人間関係の重要性」が主張された。「行政はその素材を与えるのが使命」という言葉は、何故か説得力を感じさせるものがあった。

- (4) 朝倉祝治氏（横浜国立大学）：横浜国立大学工学部におけるリカレント教育のこころみ

最後の発表は、横浜国立大学の朝倉祝治会員の報告であった。発表内容は、同大学工学部の公開講座の実施状況、参加者の状況、アンケート・追跡調査の結果及び講座の成果等であった。大学関係の会員にとっては、貴重で刺激的な報告ではなかったろうか。

冒頭に、現在の大学教育が抱えている問題として、「潜在能力の開放」「画一的教育からの脱却」「学習意欲の昂進」「受動から能動的学習へ」「社会ニーズとの不適合」「学問セクト主義」等が挙げられた。公開講座は、こうした問題をつき崩していくべく企画されたものである。

講座の種類は、①講義・実習・実験の短期コース（6日間）、②同長期コース（6か月15週、毎週5日間）、③3日間の出張講座（これまで静岡県、沖縄県、大阪府で実施）、④神奈川テクノチュアとして県と共催（12週、週3日間）4種類で、豊富な実施形態である。

これらは、参加者からのアンケート・追跡調査によるデータをもとに計画され、申込みが5倍を超えたり、講座修了率がほぼ90%以上と、驚異的な盛況ぶりとなっている。また、成果としても、本学習成果の職場還元のサイクルが縮まったことなどが指摘され、近年話題となりつつあるリカレント教育の先導的事例として、注目すべき報告であった。

なお、5番目の発表者として、山梨県韭崎市の真壁静夫会員が予定されていたが、都合で発表が取り止めとなった。「心の3・3方式」で、長年の積み重ねがある同会員だけに、発表が聞かれなかったのは残念であった。

2. 質疑応答・全体討議の概要と若干の感想

さて、以上のような発表に対して、参加者の中から活発な質疑が出された。東野会員に対する、学外講師の経費（生住昭人会員）。高橋会員に対する、他部局との連携・協力の具体及び学習成果の評価（古市勝也会員）。朝倉会員に対する、大学院の単位との相互認定（山本和代会員）。従来の大学教育の問題との関係及び会社派遣の実情あるいは講座に対するニーズの取り方（国祐道広会員）等であった。個別の応答については省略するが、担当者の意欲とそれに導かれた確かな成果があれば、事態は変えられるという印象を強く抱かせた。いずれにしても、予算の獲得、連携・協力の具体的な進め方、新設事業の開発等、今後の事業の進め方に関心が寄せられたといえるであろう。

全体討議では、朝倉会員の発表に関連したものが多かった。出張講座における関係地域及びそこでの広報の問題（国祐会員）、長期的チェアの展望（池田秀男会員）、県と大学との関係（山本恒夫会員）等が論議された。また、東野会員より、予算の問題が出され、学生の受益者負担、関係市町村との連携協力が問題提起された。

最後に、司会者としての感想であるが、「教育のイノベーションにおける伝統と挑戦」という、多少使い古された観点が、4つの事例を拝聴し終えた時点で思い起こされた。

その想いは、こうである。生涯教育（学習）が新しい理念であり、実践の枠組みであるならば、そこには従来の伝統的な取り組みとこれからの半ば挑戦的な取り組みが同居した形で存在しているはずである。実際のイノベーション（変革）とは、まさにそういう状態から生まれ出るものであり、新しいものがすぐに古いものにとって替わることはあり得ないのである。そこには、多くの人の価値観なり積み重ねがあり、社会の流れに対処する様々な活動の相克がある。生涯教育（学習）の理論なり実践は、このことに否応なく遭遇することになるだろう。

玉手会員の地道でオーソドックスな活動事例、新しい時代の要請に、最大限の人の力とカネと知恵を活用しようとする東野会員あるいは高橋会員の事例、そして次代を先取りするかのような朝倉会員の事例。分野は各々異なるが、そうした様相をいみじくも示しているように思われる。いずれの取り組みに意味があるかは、各々の置かれた立場や関心によって違おうだろうが、我々はこうした伝統と挑戦の2つの要素を常に端に睨みながら、現実をつき動かしていくのだろう。今後は、様々な制度化（システム化）の問題が登場してくるものと考えられるが、このことはあらゆる面で関係者の取り組みに影響を及ぼすことになるだろう。

ちなみに、東野会員と高橋会員の双方の事例が、会長賞に選出された。心からお喜び申し上げる次第である。